

愛知県農林水産業の試験研究基本計画2025 取組事項一覧(最終評価)

【水産業部門】

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
ア 豊かな水産資源を育む漁場環境の創造				
(7) 栄養塩環境の管理技術の開発				
・海域における適正栄養塩レベルの解明と栄養塩管理技術の開発（1技術）	A	アサリやノリに必要な栄養塩濃度を明らかにした。 下水道栄養塩増加運転試験の効果を明らかにし、シミュレーションにより周年増加運転で栄養塩増加効果が高いことを示した。	終了	—
(4) 漁場環境のICT 技術を活用したモニタリングと漁業被害軽減技術の開発				
・漁場環境のモニタリングによる赤潮、貧酸素水塊情報等の迅速な情報発信（情報発信年24回）	A	赤潮、貧酸素水塊情報を計画どおり迅速に発信した。	終了	—
・食の安全確保のための貝類毒化原因プランクトン情報の発信（情報発信年18回）	A	貝類毒化原因プランクトン情報を計画どおり発信した。	終了	—
・貧酸素水塊などによる漁業被害を軽減する技術の開発（1技術）	B	海水中の鉄イオン濃度を高める有効な鉄剤を開発した。 また、アサリなど5種の水産有用種について、室内試験で鉄剤の生物安全性を確認した。	継続	引き続き、貧酸素水塊等による漁業被害軽減技術の高度化に取り組む。
・河川における水質及び河床の調査による漁場環境の評価（3カ所）	A	豊川水系の3カ所において付着藻類調査を実施し、すべての調査地点においてアユにとって良好な餌環境レベルを下回っていることを確認した。	終了	—
(7) 漁場機能を高める干潟・浅場造成技術の開発				
・アサリの着底、成長、生残に優れた干潟・浅場などの漁場造成技術の開発（1技術）	B	造成地にて底質改善や生物生産効果を確認した。 また、室内試験により、粒度にばらつきのある基質を用いるとアサリの潜砂に有効であることを明らかにした。	継続	引き続き、アサリの生残を高める漁場造成技術の開発に取り組む。
・移植放流用アサリ稚貝の発生状況の把握及び情報の発信（情報発信年6回）	A	アサリ稚貝の発生状況の把握及び情報の発信を計画以上に行った。	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
	主な成果		取組の概要	
イ 気候変動等の環境変化に対応した水産資源の持続的利用				
(ア) 水産資源の評価手法の開発				
・数理モデルを利用した、浮魚類の資源評価技術の開発（2魚種）	A	サバによる捕食を考慮したカタクチイワシの資源評価技術を開発した。シラスについて、内湾での産卵量と漁獲の関係を解析した結果、春季産卵量が多くなりすぎても夏季の漁獲に結びつかない場合があることを解明した。	終了	—
・資源動態を考慮した、底魚類の資源評価技術の開発（1魚種）	A	トラフグ資源の年齢構成をより詳細に把握するため、年齢ごとに細分化し、10歳魚までの年齢推定を可能とする技術を開発した。	終了	—
・海洋環境と卵稚仔・プランクトンの継続的なモニタリングと迅速な情報発信（情報発信月2回）	A	海洋環境や卵稚仔・プランクトンの継続的なモニタリングを実施し、迅速に発信した。	終了	—
(イ) 水産資源の持続的利用に必要な管理手法の開発				
・資源評価に基づく環境変化や生態を考慮した、浮魚類資源の適切な管理技術の開発（2魚種）	A	カタクチイワシ及びそのシラスについて、漁獲を増大させる資源管理技術（春季内湾禁漁）を開発した。	終了	—
・海域の生産性を考慮した、底魚類資源の適切な管理技術の開発（1魚種）	A	はえ縄によるトラフグ漁において、漁期始め（10月）の延べ操業隻数を減らすことで漁獲圧を抑え、年間の水揚げ金額向上につながる管理技術を開発した。	終了	—
・外海水の流入による内湾への栄養塩供給機構の把握（1技術）	A	計画期間中は黒潮の大蛇行が継続しており、栄養豊富な底層の海水が上昇しにくい海況であったことを把握した。	終了	—
(ウ) 漁業経営の安定化につながる漁業技術の開発				
・環境や漁獲対象の変化に対応できる経営規模の把握及び漁業技術の開発（2技術）	A	底びき網漁業者の詳細な経営分析を行い、近年の漁獲対象種の変化に対し、狙いが分散することが、全体として所得を維持していること、及び操業間隔を一定程度あけることが効率よい操業であることを解明した。	終了	—
・経済性の高いアユ種苗放流手法の開発（1手法）	A	早期小型放流したアユは、漁期までに十分成長して釣獲されることや、通常放流と比較して経済性の高い放流手法であることを解明した。	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
ウ 地域の特性を生かした増養殖の推進				
(ア) 資源の維持増大・有効活用のための増養殖技術の開発				
・アサリの減耗要因に対応した増殖技術の開発（1技術）	A	移植したアサリ稚貝の秋冬季減耗を低減する生分解性袋網を民間企業と共同開発した。	終了	—
・ノリの漁期短縮による減産軽減のための安定生産技術の開発（1技術）	B	選抜及び交雑育種により、高水温耐性を持ち、芽落ちしにくい新品種候補を2株作出した。	継続	引き続き、高水温耐性及び高収穫性を持つノリの品種改良に取り組む。
・ウナギ仔魚用乾燥初期飼料の開発（1種類）	A	仔魚からシラスウナギまで育成することができる乾燥飼料を他の研究機関等と共同で開発した。	終了	—
・大型ウナギ生産技術の実用化（1技術）	A	大型ウナギ生産技術の実証試験を養殖場で実施し、大型ウナギの生産を実用化し、特許を取得した。	終了	—
・養殖業における未侵入疾病検査手法の現場への適用（1魚種）	A	イエローヘッド病等のバナメイエビ養殖における複数の未侵入疾病に対し、検査マニュアルや必要な試薬等を準備し検査可能な体制を整備した。	終了	—
(イ) 漁業経営の多角化のための増養殖技術の開発				
・新たな貝類資源としてのハマグリ種苗生産技術の開発（1技術）	A	種苗生産における各段階での好適な環境および餌の条件を明らかにし、生産現場への移行が可能な種苗生産技術を開発した。	終了	—
・経営の多角化につながるワカメ種糸生産技術の開発（1技術）	A	フリー配偶体を用いた種糸（フリー種糸）生産方法を開発した。	終了	—
・「絹姫サーモン」の安定生産手法の確立（1手法）	A	絹姫サーモンの夏季へい死は白点病およびカラムナリス病が主因であり、これらの疾病が一定期間発生していない養魚場での養殖により疾病の発生を抑制できることを示し、疾病の発生履歴に基づいて養殖環境を選定する手法を確立した。	終了	—
・金魚の生産における耐病性品種などの高付加価値品種の作出（1品種）	A	キンギョヘルペスウイルス病に耐性を持つオランダシシガシラを作出した。	終了	—